

漢法苞徳会



毎年夏になると症状が悪化する  
慢性的な病に対する腎積の治療

蓬原 南津子

日本伝統鍼灸学会 第46回学術大会 (大阪)  
2018年11月25日(日)



ご紹介をいただきました漢法苞徳会<sup>ふつほら</sup>の蓬原でございます。

この所、年々夏の暑さが強まり、暑さの邪による症状が多く見受けられるようになってまいりました。

私達漢法苞徳会では、病は外邪に侵される所から始まるという『素問』・『靈枢』を始めとする多くの古典に基づき、季節の邪と病の関係を重要視して診断・治療に当り、多くの成果を得ております。

表1 六つの季節と三陰三陽

	24節気	主之	病因 (特性)	脈状等	主治経気 (治法)
初之気	大寒(1/20頃) 立春 雨水 啓蟄	厥陰風木	風 (動)	一陰二陽 (左関上) 沈滑而長	足厥陰肝経(風木) 足少陽胆経(木火) (平肝清火)
二之気	春分(3/21頃) 清明 穀雨 立夏	少陰君火	熱 (軟)	一陰三陽 (左寸口) 浮滑而長時一沈	手少陰心経(君火) 手太陽小腸経(火化) (降火潤肺)
三之気	小満(5/21頃) 芒種 夏至 小暑	少陽相火	暑 (柔)	一陽一陰 (右尺中) 浮而濇	手厥陰心包経(相火) 手少陽三焦経(相火) (清火降逆和解)
四之気	大暑(7/23頃) 立秋 処暑 白露	太陰湿土	湿 (緩)	一陽二陰 (右関上) 長而沈濇	足太陰脾経(湿土) 足陽明胃経(燥土) (温中通陽利湿)
五之気	秋分(9/23頃) 寒露 霜降 立冬	陽明燥金	燥 (斂)	一陽三陰 (右寸口) 沈濇而短時一浮	手太陰肺経(清金) 手太陽大腸経(燥金) (潤燥育陰利水)
終之気	小雪(11/23頃) 大雪 冬至 小寒	太陽寒水	寒 (堅)	一陰一陽 (左尺中) 沈而滑	足太陽膀胱経(寒水) 足少陰腎経(水陰) (温中燥湿)

表1は、1年を6つの気に、24節季で分けたものです。  
これにより、季節の邪と三陰三陽とが関係つけられております。

二之気、三之気が君火、相火の火邪の季節です。

今日11月25日は終之気に入ったばかりの季節の変わり目です。  
邪は、下から這い上がってくる冷たい寒気です。

私達はこの表に基づいて、その時の邪をまず処理するところから治療を開始するようにしています。

本報告はここ数年、肩から腕にかけて重苦しい痛みがあり、今年6月に入り特に痛みが増強したからと来院した85歳の男性の症例を紹介するものです。抄録に示しましたように、この患者は狭心症を始めとする多くの病歴を持っています。

## 患者：85歳 男性

### 既往歴

- ・約10年前から狭心症 ニトロを常備
- ・2年目の夏頃、右鼠経ヘルニアの手術
- ・同11月末、発作性頭位めまい症にて旅先で2週間入院
- ・その他、前立腺肥大症、精神安定の薬など20種類以上服用

### 現状歴

- ・5年前位から左右の肩から腕にかけて重苦しい痛みがあり、夜間に増強
- ・暑くなった6月に入って特にひどく感じる
- ・最近ニトロの服用回数が増えた

### 所見

- ・初診 平成30年6月13日、季節は三之気、季節の邪は暑邪である
- ・両鼠径部にひどい圧痛があり、その他の腹診では特に異常は認められない
- ・腎積の治療部位である膀胱経の通谷、胃経の内庭に著名な圧痛があった
- ・腎積を想定した

季節は三の気、邪は暑邪でした。

特に今年は空梅雨で、6月から30度以上の夏日を連日出している頃でした。痛みは腕を動かさなくてもあること、これが数年に亘っていること、及び鼠径部の圧痛等から腎積の疑いを持ち、腎積の治療点である足の通谷や内庭の圧痛を調べると飛び上がる程の痛みを訴えます。

過去に作った腎積が解消し切れていない体に再び火邪が襲い、積が大きくなったための症状と考えました。

抄録に示しましたような治療をしたところ、鼠蹊部の痛みはなくなり、じっとしていても痛いのは取れました。

さらに、保冷剤を使って経筋に這入った火邪を除去するとともに、中府と膻中の圧痛から陰の側も火邪や寒邪が這入っていると想定しました。これを解消するために汎用太鍼を用いて中府や膻中と背部の反応点の導通処理をしました。

一方、もともと火邪に侵されやすい体は、寒邪に侵され、体質的に冷え症になっていることが考えられました。「膻中」の圧痛はかなりなもので、これも金銀の汎用太鍼で導通処理を行いました。

陰の側に邪が這入っているかは陰の募穴の反応から判断します。

表2は、陽と陰の募穴を示したものです。

陽経の募穴はその経の邪を現わしますが、邪が陰に入る場合は相克に這入ると考えられます。

従って、火邪は肺の募穴「中府」に、寒邪は巨闕、膻中に顕れているとみなされるのです。

表2 季節の邪 と 募穴

六気	五行	六淫	陽経	募穴	陰経	剋される経	募穴
初之気	木	風	胆	日月	肝	脾	章門
二之気	君火	熱	小腸	関元	心	肺	中府
三之気	相火	暑	三焦	石門	心包	肺	中府
四之気	土	湿	胃	中脘	脾	腎	京門
五之気	金	燥	大腸	天枢	肺	肝	期門
終之気	水	寒	膀胱	中極	腎	心 心包	巨闕 膻中

次に積についてです。

難経 55, 56 難に、五臓の積についてそれぞれの究極の病状が書かれております。

いずれもお腹の深部に痞塊等として積が現れます。これらを長い間解消できずにいると表に示すような由々しい症状が出現してくるものだとあります。

ということは、積は往々出来やすいが、このような症状を出す前に積を解消することが重要ということです。

表3 五十六難 五積について

積	名称	つくる場所	季節	邪	積が長い間解消出来ずにいると出る症状
肝積	肥気	左の脇下 盃から足	長夏	湿	咳込み、悪寒、発熱を繰り返す 熱病にかかりやすい
心積	伏梁	臍の付近から鳩尾 棒状	秋	燥	心臓がばたばたし、胸苦しい症状 が出る
脾積	痞気	胃脘 どんぶり状	冬	寒	手足の自由が利かなくなる 黄疸やいくら食べてもやせてくる
肺積	息賁	右の脇下 盃のごとし	春	風	ぞくぞく悪寒 痰や咳が出てその うち肺癰病になる
腎積	賁豚	少腹に発し、上は心下 豚のごとく上下に動く	夏	熱暑	ゼイゼイして逆上 骨もがくがく 呼吸も浅くなる パニック症状

では、積はどのようにして出来るのでしょうか？

腎積を例にその機序を説明します。

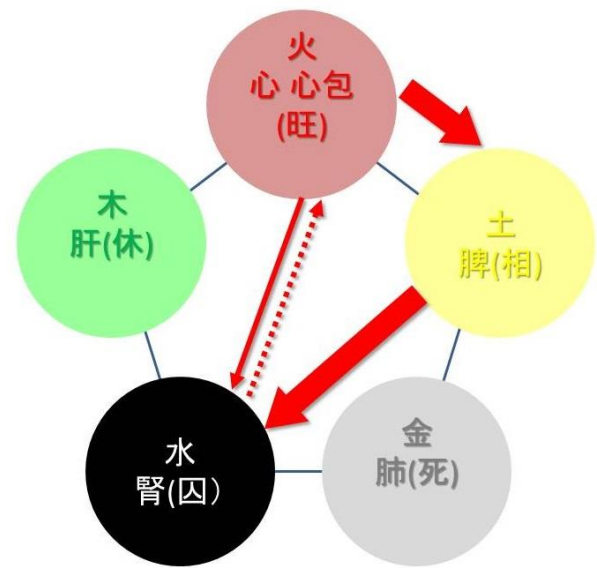
心あるいは心包が旺気する夏の時期に、脾に何らかの問題があった場合、火邪は脾を襲うのです。

しかし、脾は心・心包の子の位置にあり、火邪は脾にとって虚邪となり、ここで発症することは少ないのです。

脾は受けた火邪を相克関係にある腎に送ります。腎は受けた邪をさらに相克関係にある心・心包に送ろうとするのですが、心・心包は旺気しており、邪を受け付けません。

火邪は腎に留まり、積を構成するのです。

病む臓は腎、邪を仲介するのは脾です。腎と心・心包との関係を改めてみると、腎は心・心包を剋する地位にあるのに、逆に火邪に侵されるのです。



従って、この邪は腎にとって微邪となります。死に至るような病とはならないのです。

## 結果と考察

当患者の症状は数年前から出来ていたと思われる腎積が主原因と判断し、その治療をした結果、軽快しました。

積の機序を明らかにした当会創始者八木よりの「邪は陽経から抜く」に従い、腎の陽経である太陽膀胱経と太陽小腸経、及び剛柔関係にある陽明胃経、陽明大腸経の滎穴を利用して治療しました。積は取れたと判断しましたが、1週間後の来院で目眩等の症状が出たことが分かり、胆経、三焦経の治療を加えました。1ヶ月後來院した患者に腎積の問題はありませんでした。

このことから、まず、腎の陽経である膀胱経から火邪を抜き、次に邪を仲介した脾の処理は、『難経』75難にいう、微邪の治療法「東方実し、西方虚すれば、南方瀉し、北方を補せ」に従えばよいことに気がつきました。

具体的には、**通谷を補し、前谷または液門を瀉すことで、腎に這入った火邪を抜き、さらに、胆経の侠谿の補、胃経の内庭の瀉**で微邪の処理を行います。

さらに腎を立て直すために、**経別治療法により、腎経を補しました**。これで腎積の治療は出来たと結論出来ました。以後、これにより良い治療成果を得ております。

一方、汎用太鍼を用いた導通法により、陰に這入った火邪や寒邪を効果的に抜くことで複雑化している症状を整えました。

表4は、各種の積の基本となる治療穴を示したものです。

当該する積に関係する陽経と微邪の治療法から割り出したものです。まだまだ検討する余地はありますが、実際の臨床でかなり良い成果が得られております。

表4 五積と治療する経穴

積	病臓	腑	邪	五行	治療する経穴 〔補〕	治療する経穴 〔瀉〕
肺積	肺	大腸	風	木	胃経 厲兌(井) 膀胱経 至陰(井)	大腸経 商陽(井) 小腸経 少沢(井)
腎積	腎	膀胱	熱	火	膀胱経 通谷(榮) 胆経 俠谿(榮)	小腸経 前谷(榮) 三焦経 液門(榮) 胃経 内庭(榮)
肝積	肝	胆	湿	土	胆経 臨泣(兪) 胃経 内庭(榮)	三焦経 中渚(兪) 大腸経 三間(兪)
心積	心	小腸	燥	金	小腸経 陽谷(経) 胃経 解谿(経)	膀胱経 崑崙(経) 大腸経 陽経(経)
脾積	脾	胃	寒	水	大腸経 曲池(合) 三焦経 支溝(経)	胃経 三里(合) 胆経 陽陵泉(合)

## 結 語

積の治療は従来、難しいとされてきました。

当会では、創始者八木素萌の解明した積の機序、それに基づく邪の取り方、示唆されてきた性質の経絡や穴を用いて、実際の臨床治療で積による症状を解消出来ることを明らかにしました。



## ◆参考資料

### 腎積の治療

#### 基本の治療

- ・時邪を抜く：治療日が三之氣にありますから、まず三之氣の邪、暑邪を心包経の井穴「中衝」を瀉して抜きます。

#### 積の治療

- ・陽経から邪を抜きます。

まず、太陽膀胱経の滎穴（通谷）に灸をし、太陽小腸経の滎穴（前谷）及び少陽三焦経の滎穴（液門）を刺絡しました。

さらに腎と剛柔関係にある陽明胃経の滎穴（内庭）、陽明大腸経の滎穴（二間）、心包経の陽経・少陽三焦経の滎穴（液門）および少陽胆経の滎穴（侠谿）から「東方実し西方虚すれば、瀉火補水」（『難経』75 難）に従い、

実している火（東方）の子である土を瀉し、親である木を補します。

則ち、胃経の滎穴（内庭）を瀉し、胆経の滎穴（侠谿）を補すことで

『難経』75 難の微邪の処理を行います。

- ・侵された陰経を補します。

邪を受けた陰経、則ち腎経を補します。経別治療が効果的と八木の指導。

腎経の大鐘または太谿（金鍼）と膀胱経の飛陽（銀鍼）を結び、陰陽の交流を行います。

飛陽のゴロゴロが解消されたのを確認します。



# 漢法苞徳会

2004(平成16)年4月1日 漢法苞徳塾より漢法苞徳会と改称

・会長 鈴木福三朗

・本部 すずき鍼灸院内

住所： 東京都東村山市秋津町 5-15-1

TEL : 042-392-8839



毎年夏になると症状が悪化する  
慢性的な病に対する腎積の治療